Friend is スパイ！？

シロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｒｉｅｎｄ　ｉｓ　スパイ！？

【Ｎコード】
Ｎ０８９９Ｖ

【作者名】
シロネコ

【あらすじ】
俺がこの春に進学した王陵高校は変わった制度を取っていて、試験によってクラスが分かれるらしい。
そんな大事な試験の日に熱を出して休んだ俺は総合点０点で学年最下位。
そうして１ヶ月過ぎたある日、その日に初めて会った少女からとんでもないことを言われた…。
文才ゼロのこんなやつですが、よろしくお願いします。

あと、不定期更新になると思います。
すみません（＞＜）

出会い（前書き）

また訂正しました。

出会い

俺が高校生になって1ヶ月が過ぎた。クラスメイトの名前と顔も大体把握した。この学校の仕組みも…。　おれがこの春進学した進学校、私立王陵高校では一学期の最初にある振り分け試験と期末試験ごとに成績順でＡ　Ｂ　Ｃ　Ｄ　Ｅとランクが付けられ、成績順にクラスが分けられる。大きな行事以外の全ての授業はそのクラスごとに受けなければならない。振り分け試験の時に見事に熱がでて学校を休んだ俺、藤原（ふじわら）　和也（かずや）は総合点数０点で学年最下位。だからか自然と階級制度が出来ていき、最近では成績下位者に対する成績上位者からの嫌がらせも起き続けている。部活内でも同じ現象が起こるため俺は部活に入っていない。さらに成績上位者に対する反抗は出来ないといった先輩から代々伝わる掟があるらしい。そんなふざけた掟のせいで誰も止めに入れないし、入っても止められない。俺も何度か止めに入ったが大抵リンチにあい、止めることは出来なかった。

「止めてよ！」

昼休みの食堂に声が響き渡る。見ると少女が他の女子生徒にバッグをあさられていた。黒い髪のショートカットに茶色の瞳の少女はＥクラスの立上（たちがみ）　佳奈多（かなた）だ。だがクラスの連中は見向きもしない。というよりいつものことなので興味がないといった感じだ。

女子生徒が立上のバッグから財布を取り出した。

「止めてって言ってるでしょ！」

「えっ？なに？あんたに逆らえる権利あるのー？」

女子生徒が少女を睨み付ける。

「もう…止めてよ…」

少女は今にも泣きそうだ。

「はっ！成績がEのやつに…」

「止めろって言ってるだろ…」

静かにそう言ったあと、女子生徒の背後には金髪のロングヘアーの女子生徒が立っていた。灰色の瞳は相手を威嚇するかのように睨み付けていた。

「えっなに？私に逆らえる権利がある…の…」

女子生徒はその生徒を見るとともに声がしぼんでしまった。

「あんた。よくそんな事が言えるわね」

「朱鷺戸…結…（ときど　ゆい）」

「くっ！」

女子生徒は朱鷺戸を睨み付け、食堂を出て行った。

「大丈夫？財布の中身とか取られてない？」

朱鷺戸は立上に問いかけた。

「はい。大丈夫です。ありがとうございます！」

「うん。良かった。さてと…」

不意に目が合った。そしてこっちにやって来て俺を睨み付けながら言った。

「ちょっとあなた。どうしてこんなに可愛い子が嫌がらせを受けているのに止めに入らなかったの？」

「…ああ」

「ああ、じゃないでしょ。それともなにこの子を助けてあげようとは思わなかったの？」

「俺だって助けたいとは思ったよ。だけど無理だろ…。こんなEクラスの人間が出ていったところで馬鹿にされて終わりに決まってる。俺なんか行ったって無駄なんだよ」

「でも分からないじゃない。もしかしたら止めることも出来るかもよ」

「無理だよ…」

「そんなのやってみなくちゃ分からないじゃない」

「やったさ…五回も止めに入ったよ。だけど…一つも止められやしなかった。だから…無理なんだよ」

「そう…」

朱鷺戸の目はもう俺を睨み付けてはいなかった。

「いいわ。じゃあ放課後にAクラスに来て。じゃあね」

そう言って朱鷺戸は食堂から出ていった。

「よっ！災難だったな。かずやん」

サングラスを掛けながらそう言ってきたのは俺のクラスメイトの水城　光（みずき こう）だ。こいつはあり得ないバカ。と言いたいところだが、精密な機械を作るのが得意らしく、前にも耳サイズのトランシーバーを作ったとかいって自慢してきた。が、しかしそれしか出来ないので実技ではないペーパーテストは全く出来ずEクラスにいるというわけだ。

「何が？」

「何がって朱鷺戸に注意されたことだよ。ほら、あいつっていちいちうるさいじゃん。この前も掃除さぼってたらさ…」

そんな途方もない話を続けながら俺は、なぜあいつが放課後に来てほしいと言ったのかを考えていた。

「…そういえば、かずやん。お前、朱鷺戸から放課後に呼び出されてるだろ。しかもAクラス。もしかしてデートのお誘いですか？」

「んなわけないだろ！」

俺は水城の頭をポカリと殴り、Eクラスへ入った。

放課後の学校は静かだ。大抵の学生は部活動を行うかチャイムと同時に帰宅するかのどちらかで、教室に残って話している者などいない。変な噂もたたないだろう。だから俺は安心してAクラスに入ることが出来た。
ガラガラ
ドアを開けると同時に涼しい春の風が吹いてきた。

「ふぅ。来たわね。藤原　和也！」

机に座り、足をぶらぶらさせてやけにハイテンションで言ってきたのは朱鷺戸だ。
見ると朱鷺戸の横にもう一人立っている。昼休みの食堂で嫌がらせを受けていた立上　佳奈多だ。

「さっき立上さんには話したんだけれど、あなた私達と一緒にスパイやってみない？」

……。
はぁ、なんであんなに真剣に考えてたんだ…俺。

「あの…突然過ぎて話が見えない。もうちょい具体的に言ってくれ。あと、なんで俺の名前知ってるんだ？」

「あなたの名前は立上さんから聞いたわ。基本的な活動内容は他のA　B　C　D　Eそれぞれのクラスの情報収集、及び偵察ね。目的は嫌がらせをするバカな連中の動きを止めさせる事よ。あなたも連中をどうにかしたいと思ってるでしょ。もっと簡単に言うわ。私達の活動は強者から弱者を守ることよ。一回でもいいからやってみない？結構、本格的よ」

「でもお前のメリットはなんだ？」

「依頼人からの報酬」

「えっ？金とか貰うのか？」

「報酬の内容はそのミッションによって違うわ。で、どう？やってみない？」

確かにちょっと面白そうだな。どうせEクラスだからな。ちょっとやってみるか。暇だしな…。

「わかったよ。とりあえずやってみるよ。で、何をすればいいんだ？」

「あら、意外にすんなりと行ったわね。もっと説得するつもりだったんだけど…。とりあえず、ありがとう。ミッション内容は明日の昼休みに図書館で伝えるわ。それと二人ともわかってると思うけどこの組織のことは外部にもらしてはいけないわ」

組織化してたんだ…と自分の中でツッコミをいれていた。

「じゃあ、今日は解散！二人ともありがとうね」

朱鷺戸はそう言うと教室から出ていった。俺と立上はそんなに親しくなかったので軽く挨拶して別々に帰宅した。

出会い（後書き）

これからも頑張って書きますので、よろしくお願いします。

第一回作戦会議（前書き）

今回はほとんど会話です。

第一回作戦会議

王陵高校は広い。半径５ｋｍから成る広大な土地を利用して校舎以外に体育館が二つと巨大な食堂。さらに学生寮が男子寮と女子寮の二つ、さらに図書館まである。これだけ建てても土地は余っていて、余っている土地は森になっている。

「さてと、二人とも居るわね」

俺と立上を図書館の隅の席に座らせてから自分の金色の髪をひらりとさせて朱鷺戸　結は話し始めた。

「まずはミッション内容から…と言いたいところだけど、あなた達はまだハッキングのやり方を知らないから今日中にマスターしなさい。ここにハッキングが簡単に出来るソフトウェアがあるわ。入手方法は教えられないけど、これを今日中に完璧に使いこなせるようになるのよ」

ソフトウェアには「簡単に出来るハッキング　入門編」と書いてある。

「えっ？！ハッキングって、なんでそんなことする必要があるんだよ」

ハァ、とため息を吐いて朱鷺戸は言った。

「まず、あなた達がいるクラスは学年最下位レベルのバカが集まるＥクラスよ。このクラスの連中が騒いだところで相手にされないわ。だから逆らうためには、あなた達は次の期末テストでＡクラスに行

かなければならない。ねぇこの学校のテスト特徴って知ってる？」

「確か絶対にテスト問題の訂正がない完璧なテストを作っています。って学校説明会で言ってたわ」

珍しく立上が話した。声も小さいわけではないから、そこまでおとなしい人ではないんだな。

「その通り。なぜそんなことを教師は言ったか…。それはこの学校のテストは絶対に教師側の責任で生徒に点数はやらないという意味で言ったのよ。そしてこの教師の発言はもう一つあることを表している。なんだかわかる？」

……訂正が絶対にない完璧なテスト……作る……あっ。

「…もしかして」

「その通り、この学校の期末テストはもうすでに完成しているということよ」

しばらくの沈黙があり、立上が口を開いた。

「でも、そんなの分からないじゃない。もしかしたら期末テスト前に一つのテスト何人かの先生が何度も見直すのかもしれないじゃない」

「それはないわ。第一に期末テスト前にそんなことしてたら自分の作るテストの問題がおろそかになってしまうわ」

「なんで？」

「なんでって、あのねぇこの学校は中高合わせて１２００人以上の生徒がいるのよ。それに比べると教師の数は圧倒的に少ないわ。何度もテストを見直す暇なんてないはずよ」

なるほどな。そういう事か…。でもなんでここまではっきりと言えるんだ？

「なぁ朱鷺戸。それは本当に推測なのか？」

「ふっ。面白い映像があるわよ」

朱鷺戸はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちにある映像を見せてくれた。　映像に映っている場所はおそらく職員室だ。机の上から教師のパソコンの画面を撮影している。

「この隠しカメラばれなかったのか？！」

「教師が使っているペン立ての中に、カメラ付きのボールペンを仕込んでおいたの」

「すごいな…お前」

「こんなの楽勝よ！」

朱鷺戸は得意気に言ってみせた。

やがてパソコンの画面に文字が表示された。

「第一回期末テスト数学」

「えっ。でもこれ…」

パソコンの画面にはその文字しか表示されていなかった。

「その映像は振り分け試験の結果が貼りだされた直後の映像よ。そしてこれが…」

違う映像になった。そこには「試験は以上です。お疲れさまでした。」の文字が…。

「昨日の映像よ」

……。

「つまり、期末テストはもうすでに昨日の時点で完成しているということか…。」

「まぁ全部とは断定出来ないけど、数学は完成したということよ。他の学年の教師にもカメラを仕込んでみたけれど、どの教科も大体同じようなペースで問題が出来ていってるわ」

「本題に入るわ。私が調べた結果、完成した問題はパスワードのかかったファイルに保存されることがわかった。このファイルをハッキングして寮にある私のパソコンにコピーする。それからそのファイルを使ってお勉強会よ」

「ちょっと待った！立上はいいかもしれないが、俺は男子だぞ！女子寮に入れって言うのか？」

「そうよ。大丈夫、もし見付かったら私に会いに来たって言えばい

いから」

「わかったよ。でお前が住んでるのは女子寮の何号室だ？」

「６０３号室よ。じゃあ今日の２０：００に女子寮の６０３号室に集合ね」

「オッケー」

「わかったわ」

「じゃあ、また夜に会いましょう」

図書館から出ていく朱鷺戸の後ろ姿を見送りながら、こんなことして良いのか？という疑問が浮かんできた。そうだ立上ともまだあまり話してないし、どう思っているのか聞いてみよう。

「あのさ、立上。お前は…その…こんなことをすることに抵抗はないのか？」

立上は、俺に話しかけられたことが意外だったのか少し驚いた表情を浮かべた。

「そっ、そりゃあ悪いことだってわかってるわよ。でもね私、もういじめとか受けたくないの。それに…」

「それに？」

「私の両親少し変わってて、私がまだ小さいころから色々な道具の使い方の暗記とか運動神経を鍛えるトレーニングとかをやらせてたの」

えっ？まさか…いや嘘だろ。

「朱鷺戸さんに言われて初めて気が付いたわ。私の両親ってスパイだったのよ…」

ええー！そんなことが現実にあるのかよ！

「でも…そんな重要なことを俺なんかに話していいのか？」

「一応、あなたもスパイだからね。それに仲間だし、知っていてもらいたかったのよ。じゃあまた後でね」

そう言ってさっさと図書館を出ていってしまった。一人残された俺は、これから自分がこのメンバーの中でやっていけるのかという不安で頭がいっぱいになった。

夕食を食べた後は自由時間になっている。自分の部屋に戻る者もいれば、友達と食堂で談笑する者もいる。俺は夕食を食べ終えるとすぐに女子寮に向かった。行く途中に食堂で朱鷺戸に言われたことを思い出した。

「藤原君、これを着けて女子寮に潜入しなさい」

どこかで見たことのある形だ。耳に着けるらしい。これは確か水城が作っていた物と同じ物だ。

「これはトランシーバーよ。私がオペレーターになって藤原君を誘導するわ。藤原君は指示に従って移動して、これも活動の一部よ」

「えっ見つかっても良いって話じゃ…」

「生徒にはね…でも寮監に見付かったらアウトだから気を付けて」
寮監とは寮を監督する先生のことである。男子寮の寮監はそこまで厳しくないのだが女子寮の方は厳しいらしく見つかると指導になるという。
ハァ、気が重いな…。一人で落ち込んでいると無線が入った。
「もしもし、藤原君？あなた今どこにいる？」
「えーと、今は…」
辺りを見渡すと近くに女子寮があった。
「女子寮付近」
「了解。ではミッションスタート！」

第一回作戦会議（後書き）

読んでくれてありがとうございます。これからも頑張って書きますのでアドバイスや感想等など、ありましたらよろしくお願いします。

女子寮にて（前書き）

言い忘れていましたが、僕はこの作品を書くまで小説なんて書いたことがありません。なのでおかしな点があれば教えて下さい。

あと、読みにくいという意見がありましたので間隔をより開けてみました。読みやすくなったら幸いです。

女子寮にて

息が荒い。

心拍数も上がっている。

俺は現在、女子寮の二階にいる。

「ちょっと大丈夫？　息上がっているわよ。」

朱鷺戸　結は呑気にそんなことを言っている。

「こっちは見つからないように必死になってるんだよ！　そんな意味のないこと言わないでくれよ！」

「ハイハイ。　で、あなた今何が見える？」

「場所は二階の階段付近。　後ろに自販機、十メートルくらい先にエレベーター」

「あっ、そこはまずいわ。　寮監は基本的にエレベーターで移動しているから、そのまま上の階に上がって」

このようにして一分に一回のペースで現在いる場所を説明して指示をもらうというスタイルを取っているわけだが……早く発信機と受

信機を作って欲しいものだ。

他人から見たらただの中二病の変なやつではないか！

発信機と受信機を作ってくれれば俺がどこにいるのか、寮監がどこにいるのかリアルタイムでわかるのに……。

「藤原君？　何をぶつぶつ言っているの？　何階まで上がった？」

気付けばさっきよりも息が上がっていた。

無意識に登っていたのか。

ここは…見渡すと６の数字が目に飛び込んできた。

「ここは…６階！？」

驚いたような声を上げてしまった。

でも良かった…ここまで来れて…。

「ＯＫ。　じゃあ左に曲がったらすぐに６０３号室があるから入って」

ホッとしながら左に曲がると背の高いスーツを着ている女性を見つけた。

なにやら一つ一つの部屋にノックをしては何か言っている。

もしやあれは…寮監！！

冷や汗が流れた。

どうしよう。

見つかれば指導だ…。

そんなときこちらの空気に気付いたのか朱鷺戸が無線で声をかけてくれた。

「どうしたの？！」

「寮監がすぐそこまで来てる。　どうしよう…このままじゃ見つかっちゃうよ」

「……わかったわ。　とりあえず階段を下に降りて、五階で待機。　おそらく寮監は七階に行くはずよ。　足音が聞こえなくなったら部屋に来て」

「了解」

コンコン

無線先でノックの音が聞こえる。

「寮監が来たから一度切るわよ」

それからブチという音を最後に何も聞こえなくなった。

とりあえず指示どうりに五階に降る。

緊張の連続で喉が乾いたので、五階の階段の近くの自販機でジュースを買うことにした。

ジュースを買い、自販機の前で飲んでいると…。

「あの～」

ヤバイ！

見つかった……。

そっと、振り返って見ると茶髪で短髪の女子生徒が私服姿で立っている。

「あの、女子寮に何のようですか？」

しょうがない…ここはマニュアルどおりに。

「えっと、朱鷺戸さんに会いに来たんですけど…」

「朱鷺戸さんから誘われたんですか？」

「ええ、まぁ…」

「えっ！？　本当に結から誘ったんですか！！」

「は、はい……。」

「あの…お名前は？」

「藤原です…」

女子生徒は両手で俺の肩を掴み、真剣な眼差しを向ける。

「藤原君、朱鷺戸　結をよろしくお願いします」

それから嬉しそうに自分の部屋に戻って行った。

なんだったんだ？まぁ誤魔化せたからいいか…。

俺はそれから6階に行き、６０３号室のドアに手をかけた。

ガチャ

ドアを開けると同時にこめかみに金属が押しあてられた。

「藤原君、あなた一体何をしたの？」

冷酷な口調で朱鷺戸は言う。

「あなた、さっきの5分間で何をしたの？」

「ちょっと待った！銃を…拳銃をしまって下さい！」

「何もかも話す？」

「はい、話します話しますから…」

ようやく拳銃が下ろされ、ドアが閉まった。

「さて、じゃあ説明してもらおうかしら。このメールの意味を！！」

朱鷺戸は凄い勢いで白い携帯電話を突き出した。

「えっと、なになに？　結ついに彼氏出来たんだね！ていうか女子寮に連れてきて何をするつもり？（笑）本当にラブラブなんだね！今日は藤原君と素敵な夜を過ごしてね！！明日詳しい話聞かせてね！
千明より
って、ええー！　なにこれ？！　なんでこうなってるの？！」

「そんなのこっちが聞きたいわよ！！」

「ところでこの千明って誰？」

「あなた私が無線の電源切ってからここに来るまで人に会わなかった？」

「……あっ…」

「そいつよ。……ハァ、あいつお喋りだからな……もう明日には……」

朱鷺戸は頭を抱えながら、何やらブツブツ独り言を言っている。

「あれっ？そういえば立上の姿が見えないけど…」

「ああ……それなら……ハァ……」

相当ショックだったのか、テンションが低くい。

ガチャリ

突然部屋の窓が開き、立上が入ってきた。

「うわっ！どうしたんだよ！そんなところから！」

「これなら寮監に見つからないかな、と思ってさ」

「今、寮監はこの階にはいないんだから普通にドアから入ってこいよ！　なぁ、朱鷺戸もそう思……」

「立上さんあなた、なんでそんなこと出来るの？！　窓だって鍵が掛かっていたはずよ！」

俺の言葉を見事にスルーして、朱鷺戸は立上に問いかけた。

「ああ、朱鷺戸さんには言ってなかったっけ。　私ね、実はスパイの子供なんだ。　だから昔からこういう訓練されてたの。　訓練と言っても私に気付かれない様にしたのか知らないけど、自然を装ってさせられたから訓練なんて思わなかったんだけどね」

ハハハと笑いながら立上は話した。

衝撃的な事実に驚いていた朱鷺戸はなんとか冷静さを取り戻しながら言った。

「そっ、そっか。　じゃ、じゃあ本題に入るわよ。　今からこのパソコンを使ってハッキングの手順を覚える。　それが理解できたらこのパソコンのパスワードを解いてみて」

そう言いながら朱鷺戸はデスクトップのファイルをクリックした。

しばらくして画面にアルファベットで記号化されたプログラムが出てきた。

「これがパソコンのパスワードのプログラムよ。ここにパスワードの情報は全て載っているわ」

「じゃあ、この意味不明なアルファベットの中に答えがあるってことか…」

「そうね…。でも結果としては、藤原君か立上さんのどちらかが出来ればいいわ」

「多分俺は無理そうだから立上に期待だな…」

ふと、立上に目をやると熱心に「簡単に出来るハッキング　入門編」をパソコンで読んでいる。

説明の手順どうりにプログラムを解析していく。

説明を見てみたが最初の二行しか理解出来なかった。

「どう？　出来そう？」

「ちょっと待って……わかったよー！」

最後にエンターキーをパシッと打った。

画面には「ＯＫ」の文字が表れた。

「えっ！？　もう！？　ちょっと立上さん！　あなたが来てからまだ３０分経ってないわよ！？」

「いやいや、ただ説明どうりにやっただけだよ」

「そんな馬鹿な……あのソフトは専門用語とか沢山あって、その意味とか知らないかぎり調べないと分からないはずなのに……」

「知らないかぎり……でしょ？」

「うそ……知ってるの？　それにしては量が多すぎるわ。　あなた……一体…」

「朱鷺戸さんは日本の都道府県全て覚えてるよね」

朱鷺戸の声をさえぎる様に立上は言った。

「えっ、ええ勿論……」

「いつ覚えたの？」

「それは…幼い頃に」

「朱鷺戸さんは幼い頃から都道府県を覚え始め、私は専門用語を覚え始めた。　それだけの違いだよ……それだけの……」

「じゃあ、あなたがＥクラスにいる理由って……まさか…」

「朱鷺戸さんが思っていることで大体あってるよ。　私は……みんなのやっている勉強が理解出来ないの。　小さな頃からずっと…両親が出す課題を…みんなと違うことをやってきたから、私の学力は中学生以下なのよ。　先生に質問したところで知らない公式や知らない単語やらでお手上げなの。　私は中学受験で補欠合格でここに入学したの。　中学に入ってから課題の難易度も上がったから普通の勉強なんて手が付けられなくなった…。　だからＥクラスなんだよ」

気まずい空気が流れる。

俺はどうしたら良いのか分からず、下を向いていた。

「ああ！　ごめんごめん！　なんか暗くなっちゃったね！　朱鷺戸さんこの後どうする？」

「うん。　大丈夫だよ。　そうねぇ…とりあえず立上さんが手順を理解出来たみたいだから……今日は解散！　また明日にしましょう」

こうして俺は結局何もやらずに男子寮に帰った。

女子寮にて（後書き）

読んでくれてありがとうございます。アドバイスや感想等などあれば幸いです。

仲間入り（前書き）

投稿が遅くなってすみません。（＞＜）

気まぐれで書いているので遅くなりました。

仲間入り

朝、目が覚めてカーテン越しに空を見上げるとそこには雲一つない青空が広がっていた。

空が晴れていると気分も良いものだ。

そのせいか今日はいつもより早くお弁当ができた。

なぜお弁当を作るのかと言うと、週に一度送られてくる仕送りで毎日食堂で食べてしまうと、すぐにお金がなくなってしまうからだ。

だからお昼はお金のかかる食堂ではなく、お弁当を食べている。

Eクラスに入ると、立上の席で朱鷺戸と立上が話していた。

藤「2人ともおはよう」

立「おはよう藤原君」

朱「……」

朱鷺戸のテンションが異様に低いので、俺は立上に小さな声で訳を聞いた。

藤「なぁ、朱鷺戸はどうしたんだ？」

立上の後ろの席を借りて座ってから、こそっと質問した。

立「私も今朝初めて知ったんだけど、Ａクラスでメールの件でからかわれたんだって」

俺達はそっと聞こえないように話していたつもりだったが、朱鷺戸には聞こえていたらしい。

バンと机を叩いて凄い勢いで言った。

朱「そうよ！！　まったく、私の高校生活どうしてくれるのよ！！　あのメールのせいで千明とかの女子からからかわれるし、男子からは何故か睨まれるし……。　とにかく！　Ａクラスに戻れなくなっちゃったじゃない！！」

立「ま、まぁ結ちゃん一旦落ち着こうよ。　他にも話すことあるんでしょ？」

ハァと朱鷺戸はため息をついて話し始めた。

朱「私達の活動が風紀委員にバレ始めたの。　まぁもっと具体的に言うと感付き始めたってとこね」

藤「もしかして昨日の……」

朱「そうよ。　昨日の女子寮潜入ミッションで藤原君が女子寮に入るところを風紀委員の子に見られてしまったの」

藤「ちょっとまて、それって学校の大問題にならないか？　ストーカーとやってること変わらないし……」

朱「ならないわ。　この学校では、女子の誰かの許可があれば男子は女子寮に入れるのよ」

藤「じゃあ、そんなに問題にならないんじゃない？」

朱「ハァ、分かってないわね。　藤原君は今年入ってきた外部生。その外部生が入ってきて1ヶ月で女子寮に立ち入ったとなれば問題になるでしょう」

藤「つまり……結局、ストーカー行為と変わらないってことじゃねーか！」

朱「で、私が登校したら風紀委員から質問攻めにあったわけ。　あなたとの関係は、はぐらかしておいたけど……次に質問されたら答えられないわ」

立「じゃあさ、結と藤原君が付き合えばいいんじゃない？」

朱・藤「「えっ！？」」

突然の爆弾発言にその場が氷ついた。

幸い小さな声で言ったのでクラスの奴らには聞こえて……。

？「お前ら付き合ってんのか？」

背後から声がした。

藤「み、水城！　お前いつからそこに！」

水「朱鷺戸がミッションがどうのこうの言ってた辺りからいたけど……」

もしかしてバレたか？！

三人は冷や汗をかいた。

水「で、お前ら付き合ってんのか？」

藤「いや、その……「そうよ！」

朱鷺戸がそう宣言してから俺に耳打ちしてきた。

朱「今はこう言って注意を逸らしましょう」

俺は黙ってうなずく。

目的がバレてはまずいので、それっぽくやり過ごすことにした。

水「マジかよ！！　やはりあの日の約束はデートｏｒ告白だったわけだ！！」

おそらく、あの日とは俺が朱鷺戸にスパイにならないかと言われた日だろう。

一人で盛り上がっている水城はビシっと指を差してくる。

そんな水城を冷ややかな視線で俺と朱鷺戸は見ていた。

だが、そこに空気を読まない発言が……。

立「そうだ！　お二人さんキスしてよ！　キス！！　はい！カウントダウンいきますよ！　３……２……うぐっ！！」

朱「調子乗ってんじゃねー！！」

立上は朱鷺戸にアッパーを食らっていた。

水「そういえば、かずやん。　ミッションってなんだ？」

再び水城以外の三人が氷ついた。

藤「えっ？！　そ、そんなことより今日はいつもより早いな！　なんか良いことでもあったのか？」

水「女子寮がどうのこうの言っていたが……」

藤「おっ！　見ろ！　空が快晴だぞ……」

ポンと朱鷺戸に肩を叩かれた。

もうよい、ということだろう。

水「おい！？　かずやん！」

朱「水城君、私から話すわ」

そして、朱鷺戸は今までのことを全て話した。

最初は、きょとんとしていた水城だが話が進むにつれて目の色が変わってきた。

そして全て話し終えると目を輝かせて言った。

水「是非とも俺も入れてくれ！！」

しかし、朱鷺戸はすぐには了承しなかった。

朱「ダメよ」

水「なんで？！」

朱「そんなに大人数にしたくないの。　それに私が気に入った人しか入れるつもりないし……」

水「なっ！　俺に魅力がないってんのか！？」

朱「とにかく！　しばらくは三人で活動する予定だから絶対に誰も入れないわ」

水「マジかよ……。せっかく小型カメラや小型トランシーバーを活用出来ると思ったのに……」

朱「！？」

朱鷺戸の反応を水城は見逃さなかった。

水「どうした？　朱鷺戸？」

朱「いや……。　それって何処で手に入れたの？」

水「えっ？　ハー〇オフで安い部品買い漁って自分で作ったんだけ

ど」

朱「！！」

それからそっと朱鷺戸が俺に耳打ちしてきた。

朱「水城ってそういうの作るの得意なの？」

藤「ああ、そうだよ。　前も耳に着けるトランシーバー作ってテストしたことあるけど、ちゃんと会話出来たぜ」

朱「！！」

水「……じゃあ、俺自分の席戻るわ」

そう言って自分の席に戻ろうとする水城を朱鷺戸が引き止めた。

朱「待って！」

水「？　なに？」

朱「あなたに入って欲しいの」

水「えっ？　だってさっき絶対に誰も入れないって言ってたじゃん」

朱「うっ……。　あ、あの時はあの時よ。　今と一緒にしないで」

水「じゃあ、入ってもいいのか?!」

朱「ええ!　もちろん!」

水城は、よっしゃー!と言ってガッツポーズをした。

水「ただ、一度断られた訳だし一つ俺からの条件がある」

朱「えっ?!　ええ。　なに?」

水「俺はオペレーターとして所属したい。　俺はあんまり派手に行動したくないからな」

朱「ええ。　わかったわ」

朱鷺戸は、すぐに条件を飲んだ。

キーンコーンカーンコーン

朝のホームルームの時間を知らせるチャイムが鳴った。

朱「もうこんな時間か。　じゃあ一旦解散。　また昼休みに図書館で会いましょう!」

それだけ言うと朱鷺戸は急いで教室から出て行った。

仲間入り（後書き）

見やすく書いて見ました。
見やすくなっていたら幸いです。

風紀委員（前書き）

少しいつもより長くなりました。

グダグタですみません（＞＜）

風紀委員

朱「全員いるわね？」

昼休み、俺達は図書館に集まりミーティングを始めようとしていた。

初めて参加する水城は緊張しているようだ。

そわそわしている。

朱「じゃ、まず藤原君。　朝に話した話覚えてる？」

藤「え～と、風紀委員がどうのこうの……だっけ？」

朱「そうよ。　私達は今、風紀委員に目をつけられている。　そこで打開策を考えたわ」

そう言うと朱鷺戸は一冊の青いノートを広げた。

ノートには数学の問題らしき計算式と、ある人物の情報が書かれていた。

朱「それじゃあ、まず……」

立「結ちゃん……。　授業受けずにこんなことしてたの？」

水「うわー。　ないわ……。」

朱「いや、だって……」

水「授業サボるとか、Ａクラスなのにやっちゃダメだろ……」

立「しかも、堂々と計算式の横に……」

朱「はいはい！！　私が悪かったです！！　すみませんでしたー！！」

藤「まぁ朱鷺戸も頑張って情報集めてくれたわけだし、そろそろ許してやれよ」

朱「（ごほん）。　話を戻すわ。　まずは風紀委員会の仕組みについて説明するわね。　風紀委員会では各学年にリーダーがいて、各学年で起こった問題はその学年のリーダーを中心に解決する。　という方針を取っているの。　で、私達の学年の今年の風紀委員のリーダーは１年Ａ組、小野寺（おのでら）　彩夏（あやか）っていう人らしいわ」

立「！！　結ちゃん！　それ本当？！」

立上が驚きの声を上げた。

朱「え？　ええ……そうだけど……。　何か心当たりでもあるの？」

立「うん！　私、彩夏と友達なの」

朱鷺戸に説明する立上はどこか嬉しそうだ。

朱「へー！　初めて知ったわ。　いつから友達なの？」

立「あれは……」

◆◆◆

それは、まだ立上が王陵中学校へ入ったばかりだった。

友達が話すテレビやファッションのことも何一つ知らなかった立上は、その頃からクラスで浮いた存在になっていた。

毎日机に向かって本を読む日々が続いていた。

そんなある日、立上に興味があったのか誰かが話しかけてきた。

？『あ、あの……何の本読んでるの？』

目を上げると黒い髪のショートヘアで白いカチューシャを着けた子が立っていた。

声の印象からおとなしい性格だなと思った。
本にはブックカバーが着いていたのでタイトルが見えなかったらしい。

立『え、え～と。　「学園都市」っていう本なんだけど……』
？『えっ！　もしかして今人気のあの小説？！　いいなぁ……。わ、私も欲しかったんだけど売り切れ……だったんだ……』
立『あの……もし、読み終わったら貸そうか？』
？『え！？　本当にいいの？！　じゃあ読み終わったら貸りていい？』
立『うん、いいよ！　そういえば名前は？　私は立上　佳奈多』
小『ありがとう！　私は小野寺　彩夏』
立『彩夏ちゃんだね。　よろしくね』
小『う、うん！　よろしく……』
これが2人の出会いだった。
立「……あの頃は本当に友達がいなかったから彩夏はとても大切な

友達なんだ。　彩夏はとても静かで何をやるにも消極的な子だったんだけどね……」

朱「消極的だったってことは今は違うの？」

立「彩夏はね、中学3年の時にたまたま柄の悪い先輩に絡まれちゃって、カツアゲされそうになってたの……」

◆◆◆

小「私、今日お弁当持ってきてないから食堂でパン買ってくるね」

立「うん。　わかった。　じゃあ私もついていくよ」

食堂で目的のパンを買い、教室に戻ろうとした。

ドン！

小「キャッ」

見ると柄が悪そうな男子生徒と彩夏がぶつかっていた。

男子生徒はグループで来ていて、5、6人でまとまっていた。

「おい！　てめえ何すんだよ」

小「す、すみません！」

「すみませんで済むと思ってんのか？　慰謝料出せよ！　慰謝料！」

小「えっ、でも……」

彩夏はグループに囲まれていた。

今にも泣き出しそうな彩夏を助けようと、私も文句を言おうとしたが、横から声がした。

立「ちょっと……「貴方達！　何してるの？」」

見ると眼鏡をかけた女の上級生が立っていた。

「あ～ん？　んだよ、てめえ」

「王陵高校風紀委員の清水です。　今すぐその女の子から離れて撤退しなさい」

清水という人は「風紀委員会」と書かれた腕章を見せながら不良に言った。

「あっちが勝手にぶつかってきたんだ。　俺に悪気はねぇぜ」
「では、慰謝料を請求する必要はないと思いますが」
「はっ！　さっきぶつかられてあばら骨が何本か折れちまってよ……」
「その割りには元気そうですが」
「んだと！！」
不良は風紀委員に殴りかかろうとした。
が、風紀委員は身動きひとつしない。
当たる！と思った瞬間。
「がはっ！」
不良の腹には木刀がめり込んでいた。
「！！　姉……御……」
不良は地面に倒れた。

不良に姉御と呼ばれた学ランを煽り、髪の毛を後ろで束ね、木刀を持った女子生徒は、地面に倒れた不良を上から睨み付けていた。

「！！　貴女は！！」

風紀委員が驚きの声を上げたが耳に届かなかったらしい。

女子生徒は静かだが、威圧感がある声で地面に倒れた不良に言った。

「1人の女の子を寄ってたかりやがって……おまけにあばらが折れたと抜かしやがる。　どうだい？　本当に（・・・）あばらが折れた気分は？」

次に女子生徒は残った不良に向かってドスの利いた声で言った。

「おい！！　てめえらもこうなりたいか？！」

残った不良達に問いかける。

「「「「「す、すみませんでした！！　姉御！！」」」」」

不良達は頭を下げ、こちらにも謝罪してきた。

おそらく、姉御と呼ばれたこの人は不良達のリーダーなのだろう。

凄い人だなぁと思っていると彩夏の方にやってきてこう言った。

「さっきは、うちの者が失礼したな。　でもよ、あんたももっとしっかりしな。　……次はないよ」

小「は、はい！」

そう言うと女子生徒は食堂から出ていった。

後で聞いた話だが、この人は鬼山というヤクザの娘らしい。

風紀委員からも目がつけられていて、風紀委員のブラックリストに名前が刻まれたほどの人物だそうだ。

その事件から彩夏に変化が起こり始めた……。

朱「それから何事にも強気に出るようになったというわけね……」

立「うん。　髪型も鬼山さんみたいに伸ばして後ろで結ぶようになったし……でも不良にはなれないから風紀委員会に入ったって言ってた。　彩夏みたいに弱い人を助けたいんだって」

朱「それでか……」

朱鷺戸が頭を抱える。

立「？　どうしたの？」

朱「前に……いや、何でもない。　それより水城君、例の物出来た？」

水「待ってました！　立上の話長くて、いつ終わるのかと思ってたぜ」

立上はムッと頬を膨らませた。

朱「私が水城君に頼んだ物は……」

水「発信機さ」

朱鷺戸の言葉を遮るように水城が言いながら出した物は……。

藤「キーホルダー？」

猫の形をした可愛らしいキーホルダーだった。

水「そう見えるけど、中にちゃんと発信機が付いてる」

藤「なんでキーホルダーなんだよ？」

水「これでも色々考えたんだよ！　消しゴムの中に埋め込むとかペンみたいにするとか……でもどっちも使われたらばれるからキーホルダーになったってわけ」

藤「なるほど、キーホルダーなら鞄とかに付けてもらえるな」

朱「まぁ付けてもらえるかどうか分からないけどね……。　さて、本題に入るわ。　今回のミッションは小野寺　彩夏に発信機を付けることよ」

藤「付けて意味あるのか？」

朱「私達の脅威である風紀委員はリーダー、小野寺　彩夏を中心に活動するはず。　つまりリーダーの行動パターンが分かれば、こちらは有利に動けるってことよ！」

朱「では、作戦内容を言うわ。　ターゲット小野寺　彩夏は授業が終わったら一旦女子寮に戻り、そこから近所にあるショッピングモールに行く予定よ」

藤「どこからそういう情報調べてくるんだよ」

朱「たまたま小野寺さんが教室で話してたのを聞いたのよ。　で、

発信機を付けるために尾行するんだけど最終的に誰が発信機を付けるか考えてないのよね……」

立「じゃあ、結と藤原君が良いよ！　ほらカップルならショッピングモールにいてもおかしくないし！」

朱「佳奈多～。　あんたね～」

水「いや、全然ＯＫだと思うぞ。　むしろお似合いだしな」

朱・藤「えっ……／／／」

立「じゃあ決まりだね！　じゃあ任務頑張ってください！　お二人さん！！」

朱「えっ？！　ち、ちょっと待ってよ！」

立「えっ？　もしかして結、嫌なの？」

朱「い、嫌ってわけじゃない……けど……」

完璧に立上のペースに乗せられた朱鷺戸は頬を赤くして下を向いている。

立「じゃあ、さっさと説明してよ♪」

下を向いていた朱鷺戸だが、リーダーという立場からか気持ちの切

り替えが早かった。

朱「……わかったわよ。　じゃあ私と藤原君でチャンスを狙って尾行するから、佳奈多と水城君は何かあった時にサポートして」

水「えっ？！　俺も行くの？　オペレーターなのに」

朱「じゃあオペレーター側に回って何かすることあるの？」

水「……無いな」

朱「じゃあ、授業が終わってから私がメールするから、そのメールが来たら女子寮前に集合ね」

藤「わかった」

立「了解」

水「ＯＫ」

それからその場は解散となったが……。

朱「藤原君」

朱鷺戸が急に俺を呼び止めた。

風紀委員（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

友達からアクセス数が少ないとか言われますが、僕は少数でも読んでくれる人がいるだけで満足です。（＾―＾）

これからもよろしくお願いします。m（＿＿）m

尾行～ショッピングモール（前書き）

最初に言っておきます。

グダグタです（＞＜）

尾行～ショッピングモール

藤「えっ？なに？」

図書館を出ようとしたところで朱鷺戸に呼び止められたので俺は振り返りつつ、そう言った。

朱「外に行くんだから私服着てきてね。それに……なんだから……」

藤「？　ああ、わかった」

途中、聞き取れなかったが大丈夫だろう。

でも、なんて言ったんだ？

俺は教室に戻りながらそんなことを考えていた。

放課後、男子寮に戻り私服に着替える。

俺の部屋にはルームメイトがいない、というかこの学校の寮は、そこらのマンション（中はホテルみたいだが）と変わらないくらいの大きさがあるのでルームメイトがいる生徒は1人もいない。

1人暮らしをしているような気分だ。

だから俺の部屋にあるのは趣味でやってるエレキギターとオーディオ機器とテレビと机と椅子くらいしかない。

うーん、やっぱり殺風景だよなぁ。

今度ポスターでも貼ろうかなと考えていると携帯の画面が光った。

朱鷺戸からの空メールだった。

藤「よし、行くか～」

うーんと伸びをして女子寮に向かった。

女子寮に着くともう三人は先に着いていたみたいで、

水「遅いぞ、かずやん」

立「そうだよ～。ほら結も寂しがってたし。ほら～結、彼氏さんが来たよ！」

朱「う、うるさいわねー！！」

何やら盛り上がっていた。

俺は水城と立上が制服なのに疑問を抱いた。

藤「あれ？なんで制服なの？」

立「藤原君こそ、どうして私服なの？」

藤「俺は朱鷺戸に……」

朱「いや、制服だとすぐに見つかっちゃうじゃない」

立「そんなこと言って、本当は……」

朱「まぁまぁまぁまぁ、深く考えないで。それにもうすぐ小野寺さんが来ちゃうし」

かなり強引に話を反らされた矢先にタイミングが良いのか悪いのか、女子寮から私服姿の小野寺さんが出てきた。

こちらには見向きもしないでショッピングモールの方向へ歩いていく。

朱「追うわよ」

眼鏡（だてだろうか）を掛けながら小声で指示をだす。

藤「なんで眼鏡掛けてるの？」

朱「一種の変装よ。行くわよ」

ショッピングモールに着くまで俺たち４人は尾行しつつ、何か話そうということになった。

藤「そういえば朱鷺戸は普段勉強とかしてるの？」

朱「何の？」

藤「まぁ、色々……」

立「ハァ……ダメダメダメ！！結と藤原君は付き合ってるんだよ？そんな普通の友達みたいな会話はダメだよ！！」

急に立上がアドバイスし始めた。

立上ってこんなに恋愛事が大好きだったっけ？

もっとおとなしくて明るい女の子だと思ってたんだけどなぁ。

水「じゃあお前だったらどうするんだよ」

立「えっ？！　それは……」

突然の質問にエへへと笑って誤魔化す。

それから間もなく彼女は、俺たちから白い目で見られることとなった。

ショッピングモールに着いた俺たちは、ここで二手に分かれることになった。

発信機を付ける係とそれをサポート？する係にだ。

朱「じゃあ私と藤原君は、なるべく近づいてチャンスを伺うから佳奈多達は何かあったらサポートして」

立「わかった」

水「了解」

朱「何か質問あるかしら？」

すぐさま立上がハイハイと手を上げる。

立「どうして付き合ってるのにお互いの名前で呼び合わないんですか？」

朱「私たちは正式には付き合っていないからよ」

立「えっ？でも今日の朝、水城君に『付き合ってるのか？』って聞

かれて『そうよ！』って即答してたじゃないですか」

朱「あれは……」

藤「わかったわかった。呼べば良いんだろ。呼べば」

立「はい！」

じゃあ、行くからと言うと立上から黒い物体を渡された。

藤「何これ？」

立「発信機だよ！これで名前で呼び合ってるか確認出来るし」

藤「そりゃないよ。こっちだってプライバシーがあるんだから。水城も自分が作った物をこんな使われ方されたくないだろ？」

水城からも反対意見が出るはずだと思い、話を振ってみたが、

水「別にいいんじゃない？面白そうだし」

逆効果だった。

彼の一言でこの案が決定してしまった。

立「じゃあ頑張ってね！それと手ぐらい繋ぎなさいよね、お二人さん！」

朱「藤原君、急いで追い付くわよ！」

立上が朱鷺戸をジロッと睨む。

朱「か、和也、急いで追い付くわよ／／／」

藤「あ、ああ……」

ちらりと立上を見ると満足そうにうなずいていた。

ようやく小野寺に追い付いた俺と朱鷺戸……じゃなかった結は、化粧品売り場で小野寺を観察しているところだ。

女物ばかりがならぶ店内は、男性の俺にとって居心地の悪いところにしか思えない。

結は欲しいものがあったのか、観察も忘れてその商品に夢中になっていた。

よくリーダーやってるよ、なんて思いながら小野寺に視線を戻すとレジに並んで会計していた。

和「おーい、結」

結「な、なに？か、和也／／／」

まだ呼び慣れないせいか頬が真っ赤になってしまう女の子。

ちょっとドキッとしてしまった。

和「あの、急がないと行っちゃうよ」

結「あ、うん……」

結は、名残惜しそうに紫の香水を見つめてから任務に戻った。

途中、小野寺がトイレに入った。

その時は小野寺との距離はほとんどなく、結も続けてトイレに入る形になった。

小野寺の姿が見えなくなった瞬間、小野寺がトイレから出てきた。

つまり、Uターンしたのだ。

結「！！」

結はとても驚いただろう。

だが、そのチャンスを見逃しはしなかった。

すれ違うと同時に相手の盲点からキーホルダーを、先ほど買ったと思われる化粧品店のビニール袋の中に入れた。

しばらくしてトイレから結が出てきた。

和「お疲れさま。にしても驚いたね。まさかUターンしてくるなんて」

結「そうね。あれは尾行してる人がいないかを探るよくあるテクニックよ」

和「ってことは尾行がバレてたってこと?!」

結「そうかもしれないし、感付き始めたのかもしれないわね。私としては後者の方がいいけど……」

結はうーんと伸びをしてから、

結「さてと、じゃあこのまま2人でどこか行きましょ?」

和「えっ?他の2人はいいの?」

結「いいのよ。私たちが尾行してる時に蒔いちゃったから」

どこまで凄いんだよ、この人は。

結「和也は、どこか行きたいところある？」

和「うーん。楽器屋とかかな」

結「えっ？何か弾けるの？！」

和「エレキを少しね」

結はとても意外だという表情をした。

楽器屋に着くとまず右側にピアノがいくつか並んでおり、左側にはＤＪが使うと思われる機材があった。

さらに奥に進むと右側にエフェクターやアンプなどエレキ関係の機材がずらっと並んでいて左側にはギターコーナーと書かれた空間があり、その中には数十本ものギターが所狭しと並んでいた。

俺と結が並んでいるギターを見ていると中年の店員さんが話しかけてきた。

店「何か弾いてみますか？」

和「ああ、はい。結、なんか弾いて欲しいギターある？」

結「これ！」

指を指す方向には赤いボディに白と黒のストライプがシグザグに塗装されてあるストラトタイプのギターだった。

これって明らかに〇ァン・ヘイ〇ンモデルのギターだよね。

和「あの……結？どうしてこれがいいの？」

結「えっ？だってこのデザイン、カッコいいじゃない！」

まぁ、それは認めるけど世界的に偉大なギタリストの彼のギター（本物ではないが）を俺みたいな一般人が弾いていいのだろうか？

店「あの、どうしますか？」

和「じゃあ、これで」

結局、流れでそれを弾くことになってしまった。

ギターをチューニングしてもらってからギターをアンプに繋ぎ、結構歪ませて音を出した。

ギターが良いせいか寮で弾いている何倍も上手い気がした。

知っている限りの彼のバンドの曲を弾く。
１０分位弾いてからありがとうございましたと店員さんにギターを渡す。

店「いや～君上手いね～バンドとか組んでるの？」

和「いや、組んでないです」

店「バンドは組むと楽しいよ～。そのうち組むといい」

和「はい。考えておきます」

結局、楽器を弾いただけで店を出ることになった。

結「和也って凄かったのね」

和「そんなに凄くないよ。あれくらい」

結「それでも私は凄いと思ったわ」

和「ありがとな。結」

結「／／／」

和「結は、どこか行きたいところある？」

結「そうねぇ。カフェ……がいいな」

和「じゃあ、そこに行こうか」

エレベーターで三階のカフェに向かった。

実験都市（前書き）

ちょっとＳＦ要素を取り込んでみました。

実験都市

カフェは結がオススメだと言う、ちょっと洒落たヨーロッパ風の店に入ることにした。

店内に入ると左側の外が見渡せる壁ぎわのテーブルに案内された。店内の灯りは明る過ぎず暗すぎずといった感じでレンガで作られたひんやり冷たい壁と店内を流れるジャズが今日の疲れを癒してくれる気がした。

特に飲みたいものがなかった俺はアイスコーヒーを、結はカフェ・オレを注文した。

和「落ち着くね。この店」

結「そうでしょ？よくここに来て勉強してるの」

和「へぇ、ここで勉強か……」

確かに静かだし勉強場所には最適かもなぁと考えていると注文したアイスコーヒーとカフェ・オレが運ばれてきた。

和「じゃあ、いつも来る時は制服なの？」

結「うん。だから私服で来るは初めて」

微笑してから周りを気にし始める。

結「だから周りから浮いてないか不安なのよねぇ」

周りを見ると制服姿の学生や背広を着たサラリーマンなどが多くいて、私服の人たちはあまり見られなかった。

そういえば今日は尾行に集中してて、結の服装を全然意識していなかった。

見ると金色のラメで英語が書いてある白いTシャツに黒色のパーカーを着ていて上が白くて下がチェック柄になっているスカートに太ももの半分くらいまである黒いタイツという格好だった。

一方、俺は黒いTシャツにチェック柄の羽織を着て、下はジーンズというラフな格好で来ている。

結「夕日を見ると何だか懐かしい気がするのよね……」

唐突に話始めた彼女はビルの向こうに沈んでいく夕日を見ている。

結「……」

一瞬、とてもつらそうな顔をした。

和「結？どうしたの？」

結「和也……ここからは、重大な話よ。よく聞いて」

ゴクっと唾を飲み込む。

結「今日、この市……いや、この県の半分の市が実験都市に指定されたわ」

和「？　実験都市って何？」

結「その名の通りよ。ここら辺の市である実験が行われるの」

和「ある……実験？」

結「そう……実験内容を簡単に言うと、脳の活性化よ」

和「？　全然意味分からないんだけど……」

結「まぁいいわ。今言ったことは頭の片隅にでも覚えておいて。さてと、帰りましょう？」

和「あ、ああ……」

残っていたアイスコーヒーを飲んで席を立った。
会計を済ませ、エスカレーターに乗って一階に降りると後ろから誰かが走ってくる音がした。

立「ハァ……ハァ……もう！どこにいたのよ！」

結「ああ。ゴメンゴメン、ちょっとお茶してたの」

結が適当に返事すると水城もやってきた。

水「2人とも酷いぜ。俺たちは、ずっと探してたっていうのによ」

和「悪い悪い。今度、食堂でなんか奢るからさ」

立「ええと、じゃあ私はキツネうどんね」

俺は水城にだけ言ったつもりだったのだが立上が奢って欲しいものを言い出した。

和「いや、俺は水城に言ったつもりだったんだけど……」

立「ええ！？私の分も奢ってよ～」

和「結に奢ってもらえよ」

結「いいわよ。私がメニュー決めてもいいならね」

立「……いえ、遠慮しときます」

立上は急に青ざめた表情をして拒否した。

前に何かあったのかなぁ？

それから４人で寮まで一緒に帰った。

寮に帰ると寮内にある大浴場に入り、それからベッドに寝転んだ。

『実験都市に指定されたわ』

『実験内容は脳の活性化よ』

一体、結はなにが言いたかったんだ？

だが、そんなことを考えていると段々視野が狭くなっていき、俺は深い眠りについた。

朝、起きるととくに変わった様子はなかった。

いつも通りに弁当を作って朝飯を食べ、歯磨きをしてから制服に着替えた。

教室に着いても、みんないつも通りに話したり勉強したりしている。

なんだ、いつも通りじゃないか。
実験都市に指定されたからって何も起きないじゃないか。
ふぅ心配して損した。

和「おはよう」
水「おはよう。かずやん」
立「おはよう。藤原君」

とくに話すこともなかったので、それだけ言うと席に座り、読みかけていた本を読むことにした。

しばらくすると担任が入ってきて、朝のホームルームを始めた。

「ええと、今日は授業をやらずに校外学習に行くことになった。全員荷物をまとめて9時に昇降口に集合すること」

それだけ言うと担任は出ていってしまった。
突然の出来事に教室がざわつく。
もしかしてこれが昨日、結が言ってた実験都市のせいなのか？

水「かずやん、何難しい顔してるんだよ」

和「いや、ちょっと納得いかなくて……」

水「授業が無くなったんだぜ？もっと喜べよ」

和「でも……」

水「さっさと荷物まとめて行こうぜ。遅れると迷惑だし」

和「……ああ」

俺は水城の後に続いて教室を出た。

昇降口に集合すると人で溢れかえっていてとても動ける状態ではなかった。

どうやら全学年、授業が中止になって校外学習になったみたいだ。

どう考えてもイレギュラーな事態だったが、どうこう言ったところで何も変わらないので黙っておいた。

やがて人の流れが出来始めた。

流れの先はグラウンドだった。

そこには何十台ものリムジンバスが止まっていた。

止まっているバスは会社もバラバラで、まるでパーキングエリアに来たのかと思ってしまう。

とりあえずリムジンバスに乗ると適当に席に座った。

これが実験の前触れなのか？

なんとなく嫌な予感がした。

　バスは列を作りながらどこかへ向かっていた。

周りから見れば、すごく不思議な光景だっただろう。

何十台ものバスがずっと連なって走っているのだから。

水「なぁなぁ、どこへ行くのかな？」

俺の隣の席の水城が話しかけてきた。

和「さぁな……でも、なんか嫌な予感がする」

水「確かに……俺たちの学年だけならともかく、全学年が校外学習だもんな。しかも目的地同じだし」

俺も不自然に思って先生にどこへ行くのかと質問してみたのだが、サプライズだから教えられないと誤魔化されてしまった。

バスが走りだして二時間くらい経っただろうか。
高速道路を走っているので周りの景色はフェンスで見えない。
するとバスが速度を落とし始めた。
外の景色を見えなくしていたフェンスは途絶え、緑色の木々で覆い茂る森と田んぼが目に飛び込んできた。
おそらくここで高速を降りるのだろう。

高速を降りて田舎道を走ること１０分、窓から見えたものは近未来的な形をした東京ドームくらいの大きさの白い建物だった。
バスはその建物の地下に入っていく。
そして地下駐車場みたいなところでバスは停車した。

バスから降りると担任が説明を始めた。

「ええ、今日ここへ来てもらったのはお前たちに国のプロジェクトに参加してもらうためだ」

ええ！と、どよめきが起こる。

「そんな訳なのでこれから申請用紙を配るから自分の名前と住所を書いてくれ」

和「あの、先生。これは強制ですか？」

「まぁ、なにせ国からの命令だからな。嫌なのか？」

和「いいえ、そういう訳ではないのですが……」

なんとなく嫌な予感がしただけだ。

「そうか、じゃあ集めるぞ。出席番号順に持って来い」

自分の名前と住所を書いて、担任に渡した。

クラスの全員が渡し終えると白衣をきた三十代くらいの男の人がやってきて、担任と少し話していた。

「……この子たちですか。……を受けるのは」

「はい。よろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそ」

耳を澄まして聞いていたが、俺にはその部分しか聞き取れなかった。

「よーし、じゃあこの白衣をきたお兄さんについて行ってくれ」

「はーい、じゃあ案内しますね」

そうして俺たちは、笑顔でそう言った白衣をきた人を先頭に施設の中へと入っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0899v/

Friend is スパイ！？

2011年10月9日05時10分発行